

山村における地域生活と家の変容

——新潟県安塚町の事例——

佐藤 康行・内田 健*

一 はじめに

日本の社会は一九六〇年代の高度経済成長期を通して生活様式が変化し、家族のあり方もこの時期に大きな変容をとげた。一九八〇年代以降は消費社会化が早足で進行する裏側で、高齢化が急速にすすんでいる。高齢人口（六五歳以上）比率は一九九四年に一四%を超えて世界保健機構の定義する「高齢社会」段階に突入し、二〇〇〇年には一七・七%に達している。人口推計によれば、この趨勢は今後すくなくとも約五〇年間は持続する（国立社会保障・人口問題研究所二〇〇二）。われわれは人口の高齢化を与件として、これからの社会を構想していかねばならない。

日本では国土の七割近くを中山間地域が占めている。中山間地域では高齢人口比率が日本全体とくらべて顕著に高く、高齢社会の問題が先行的にあらわれている。従来、山村地域にはいわゆる伝統的家族が残っている

と考えられてきた。しかし、挙家離村が陸続と起きた結果、人口と世帯数の減少と過疎化が進行し、中山間地では高齢者だけが残ри、彼らの単独世帯や夫婦世帯が増加しているのが現状である。

高齢者にとって、生活全般にわたる住みよさや生きがいは、家族生活と地域生活のあり方と密接に結びついている。家族生活のあり方についていえば、同居している子はむろん、別居している子とどのような関係をむすび、どのように互いの生活を支えあっているのか、その際、家の存続や継承の問題、そして家意識がどのように作用しているのか、といったことが重要な意味をもつ。他方、地域生活についていえば、同じ集落、同じ町で暮らす人びととどのような絆でむすばれ、日常生活の相互扶助をどのようにおこなっているのが重要な意味をもつ。家族と地域社会は、いずれも高齢者の幸福 *well-being* の実現に対して強い影響力をおよぼしているのである。

中山間地の高齢者は、身体的・精神的な条件が許すかぎり、夫婦で、あるいは一人で、生まれ育った集落で暮らしつづけ、それができなくなると山を降りて子どもたちの家に入る傾向にある。そうして、一軒また一軒と挙家離村していく。しかし、いま現在山村で暮らしを紡いでいる高齢者は、まったくの孤立状態におかれていると言い切つてよいものだろうか。既婚の子どもが親元で同居するケースは年々減少しており、その意味でたしかに家は解体したといえるだろう。しかし、中山間地で高齢者が長期にわたつて生活を営んでいくうえで、家の福祉機能をカバーする他出家族のネットワークや地域住民のネットワークが果たしている役割は決して小さくないと思われる。

右記の課題意識にもとづき、本稿では、中山間地域における高齢者の幸福な生活の実現を大きく左右する家族生活と地域生活の実態を記述し、若干の考察を提示することを目的とする。

二 安塚町の概況

新潟県東頸城郡安塚町は、県西南部に位置し、東は大島村、西は牧村、南は長野県飯山市、北は浦川原村に接している。旧三か村（菱里・小黒・安塚）の合併を経て一九五五年八月一日に町制を施行した。町制施行当初の人口は一万一一七三人、若年人口層が相対的に厚いピラミッド型の構成をなしていたが、高度経済成長期に生産年齢人口と年少人口を中心とした住民の流出に見舞われた結果、高齢人口の相対比が急激に上昇し、日本全国や新潟県全体に先んじて高齢化がすすんできた（図1・図2）。一九九五年時点で人口は四一七六人と五五年からの四〇年間で六割強の減少、同じ期間で世帯数も三分の二に減り、世帯規模も五・七人から三・二人へとほぼ半分に縮小した。一九九五年の国勢調査によれば、六五歳以上人口が二八・五%を占めている（表1）。

町の主要産業である農業の実態を概観しておこう（表2）。農家比率の推移をみると、一九六〇年には八二・一%の純農村だったが、九五年には六三・三%に低下している。コシヒカリを主要銘柄とする米が主要農産物であり、その多くは山間に立地する町の景観を彩る「棚田」で栽培されている。一九九五年の農業センサスによれば、平均耕地面積は七反四畝。五反未満の小規模農家が四五%を占め、経営規模一町歩以上の農家は四分の一に満たない。内訳をみると、専業農家は一九八五年以降ほぼ一三%台で

表1 安塚町の年齢層（3区分）別人口の推移（1955-1995）

年齢	1955		1960		1970		1980		1990		1995	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
0-14	4,241	38.0	3,685	36.2	1,825	24.4	1,116	18.8	752	16.0	575	13.8
15-64	6,131	54.9	5,700	56.0	4,840	64.7	3,863	65.1	2,899	61.8	2,411	57.7
65+	801	7.2	794	7.8	814	10.9	958	16.1	1,040	22.2	1,190	28.5
計	11,173	100.0	10,179	100.0	7,479	100.0	5,937	100.0	4,691	100.0	4,176	100.0

資料：「国勢調査」各年版

図1 安塚町の人口と世帯数

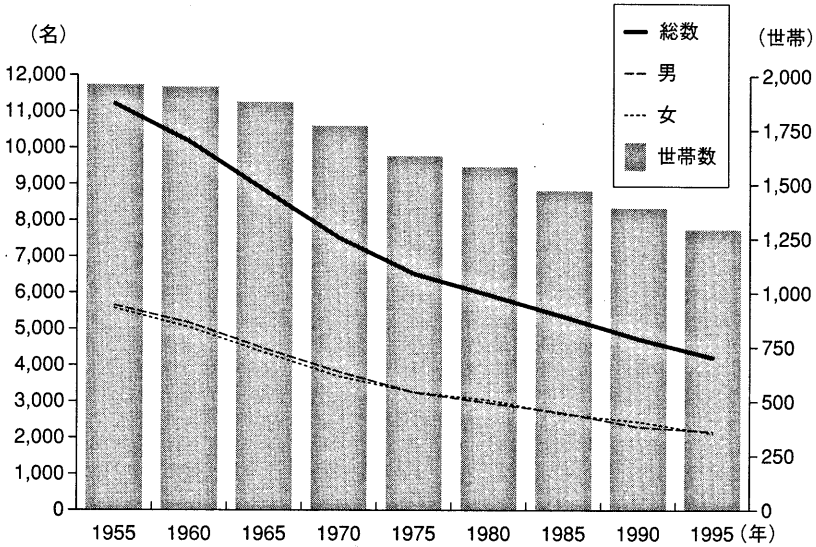
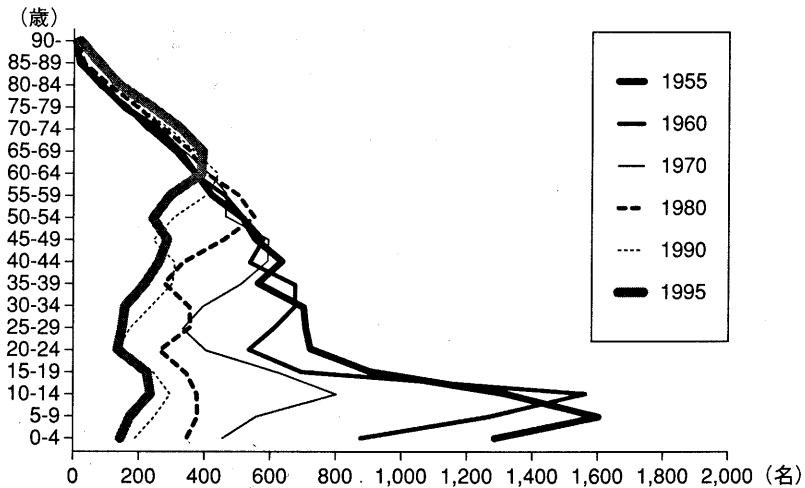


図2 安塚町の人口構成の推移



資料：「国勢調査」各年版

横ばい、全国各地の農村の例に漏れず兼業化が進行しており、町内の農家全体のほぼ四分の三は第二種兼業農家である。

町は四〇あまりの集落から構成されているが、急激な人口流出により自治活動に支障を来たす地区もあらわれたため、いくつかの集落の合併・統合がおこなわれた結果、現在は行政が直接対応する集落単位として三〇の「自治単位」に区分されている。集落のほとんどは、小黒川、細野川の両岸に展開しており、標高六〇メートルから四六〇メートルの中山間地に住居が点在する山村である。また、平年で二メートルから四メートルの積雪にみまわれる国内有数の豪雪地帯であり、「特別豪雪地帯」にも指定されている。雪に閉ざされる暗く長い冬の暮らしを忌避した人びとの転出も、この四〇年あまりの人口減少を加速させた。

一九九〇年代に入ると交通基盤の整備がはかられ、四〇三号線の開通（一九九三年）、「ほくほく線」の開業（一九九七年）、上越―魚沼間をつなぐ高規格道路の整備などにより、県内各所、関西、首都圏からのアクセスが向上してきた。こうした交通インフラの整備と並行して、町はさまざまな地域振興策を打ちだしている。その独自性は、住民の生活に重く垂れ込め、その行動範囲や意識の内閉をなにかば宿命づけてきた「雪」という自然条件を、まちづくりにとって

表2 安塚町の農家数・農家率の推移

年次	農家数と農家率		専 業		1 種兼業		2 種兼業	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1960	1,589	82.1	517	32.5	840	52.9	232	14.6
1965	1,523	81.4	271	17.8	886	58.2	366	24.0
1970	1,429	81.1	170	11.9	826	57.8	433	30.3
1975	1,273	78.3	117	9.2	667	52.4	489	38.4
1980	1,196	75.9	138	11.5	429	35.9	629	52.6
1985	1,041	70.6	141	13.5	295	28.3	605	58.1
1990	920	66.1	120	13.0	124	13.5	676	73.5
1995	822	63.3	114	13.9	78	9.5	630	76.6

資料：「統計でみるやすづか」1982, 1987, 1997年版

の戦略的な資源として位置づけた点にある。この二〇年間に展開された「雪」を直接・間接にテーマとしたイベントや活動、およびレジャー・リゾート施設の開設をみても、町が明確な意思をもって「雪」にこだわってきたことがよくわかる(表3)。

町のキャッチフレーズは「雪のふるさとやすづか」であり、町のCIには雪だるまが描きこまれ、町のイメージキャラクターにもやはり雪だるまをかたどった「雪太郎」を採用するなど、対外的な町のアイデンティティ提示においても雪のイメージを一貫して強調している。さらに、一九九九年五月に開設された「雪のまぢみらい館」は、克雪・

表3 安塚町のあゆみ

1980年	「第1回雪上フェスティバル」を開催。
1986年	「雪の宅配便」事業を開始。発泡スチロール製の雪だるまに町の特産品を詰めて全国に配送。 「サヨウナラ後楽園球場スノーフェスティバル」を開催。後楽園球場にダンプ450台分の雪を運び込む。翌年日本イベント対象を受賞。
1989年	「雪国文化村構想」基本計画を策定。「雪と緑と人を活かした全町公園」を町の将来構想の基本コンセプトに設定。
1990年	「雪だるま温泉」の掘削を開始。 「雪だるま財団」を設立。 「キュービットバレイスキー場」を開設。
1992年	「雪だるま温泉 雪の湯」を開設。
1993年	「雪に強いまちづくりフェア」を開催。
1995年	「雪だるま物産館」を開設。町の特産品を販売する常設空間ができる。
1996年	「やすづか自由学園」を開校。廃校となった小学校校舎を利用したフリースクール。
1999年	「雪のまぢみらい館」を開設。 「女性ネットワーク」設立総会を開催。町の女性たちが主体となったまちづくりへの取り組みの促進をはかる。
2000年	「集落魅力発見事業」を開始。集落単位でのまちおこし資源の発掘促進をはかる。 在宅介護支援施設「ほのぼの園」・休憩施設「やすらぎ荘」を開設。

資料) 安塚町編「まちづくり受賞記念フォーラム資料集」および聞き取り調査をもとに作成。

利雪の両面で研究・開発・情報発信の中心的役割を果たすことが期待されている。

安塚町のまちづくり・まちおこしは住民のアイデアや参加意欲を汲みあげる実効的な回路を敷設したことが奏功し、全国的にもユニークな試みとして注目され、数々の賞を獲得し、毎年多数の視察団の訪問を受けてきた。行政と町民の「雪」にたいする考え方が転換するきっかけは、後楽園球場で開催した「スノーフェスティバル」が大きな成功をおさめたことだった（石川 一九九二）。イベントを通して安塚町の全国的な知名度が上がり、大規模なイベントを自分たちが中心となってやり遂げた実績が行政や町民に自信を与えることになった。継続して開催されてきたシンポジウムは、役場と住民が直接顔をつきあわせる機会となり、シンポジウムを通して住民の行政参加を促す手法をその後確立していくことになる。

その一方で町は、「ふるさと創生資金」で温泉掘削を実施した。一九九〇年に町が八〇〇〇万円を拠出して設立した「雪だるま財団」は、「雪国文化圏シンポジウム」、雪国の文化や経済の振興に貢献した個人・団体の功績を表彰する「雪だるま大賞」事業など、さまざまなイベントの企画・開催を支える一方で、温泉入浴施設「菱ヶ岳ゆきだるま温泉ビレッジ雪の湯」、宿泊施設「ゆきだるま温泉ビレッジ久比岐野」と「菱ヶ岳グリーンパーク」といった施設の管理運営にあたり、町外から訪れる「交流人口」を呼び込む観光資源の開発に従事している。

また、川崎製鉄をはじめ町（四〇〇〇万円出資）をふくむ一八の事業体の共同出資で発足した第三セクター「安塚総合開発株式会社」が建設した「キューピットバレイスキー場」もまた、町の重要な観光資源となっており、温泉とスキー場の利用客は、合わせて年間三〇万人にのぼる。宿泊施設や食事関係等々を含めて経済効果は大きく、臨時職員を含めて一五〇名ほどの町民の雇用を生みだしている。一九九九年六月、キューピットバレイの経営は新たに設立された「株式会社キューピットバレイ」（資本金二億五〇〇〇万円の九八%を町が出資）へ

と引き継がれることになった。経営主体の変更により、スキー場経営の成否が町の財政におよぼす影響は一層大きくなっている。

三 調査地の概要

三―一 細野地区の概要

細野地区は町の北西部、大島村と接し、標高四一一・七メートルの六夜山を背負う位置にある。人口は、高度経済成長期以降、一貫して減少をつづけてきた。挙家転出が持続的に進化した結果、表4にみられるように、一九九五年の国勢調査では世帯数三二戸、人口はこの四〇年間で三分の一以下に激減している。

一九九九年の夏に実施した面接調査で協力を得ることができたのは二五戸だった。類型別の内訳は、表5にみられるように、夫婦のみの世帯が一戸、夫婦が子と同居している世帯が九戸、配偶者と死別した高齢者が子と同居している世帯が三戸、単独世帯が二戸となっている。高齢者がいる世帯が二〇戸で全体の八割を占め、高齢者のみの世帯が九戸（三六％）を数える。対象世帯の高齢人口比率は四五・五％である。農家人口の内訳の推移（表6）をみると、一九八〇年から九五年にかけて、六〇歳以上人口の割合が二一・九％から四七・五％と大幅に上昇していることがわかる。

九五年度農業センサスによれば、農家は三〇世帯で総耕地面積では水田二一町歩に

表4 対象地区の人口と世帯数の推移

		1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995
細 野 地 区	人 口	316	280	239	218	178	154	123	120	100
	世帯数	55	53	49	48	43	40	34	33	32
朴の木地区	人 口	399	370	319	243	206	193	147	119	101
	世帯数	67	68	66	56	52	47	44	34	32

資料：「統計でみるやすづか」1982, 1987, 1997年版

たいして畑が
八反、畑の大
半は自家消費
分の野菜栽培
に使われてお
り、販売用の
作目はコシヒ
カリを主力と
する米に特化
している。町
内でもつとも
農家率が高
く、専業農家
比率も二三・
三％と比較的
高い。
村役員は区
長・副区長・
班長・委員各

表5 細野地区・朴の木地区調査対象世帯の類型

	細野地区				朴の木地区			
	1999年調査時		2000年調査時		1999年調査時		2000年調査時	
	N	%	N	%	N	%	N	%
夫婦のみ	11	44.0	9	40.9	11	52.4	10	62.5
夫婦と同居子	9	36.0	9	40.9	5	23.8	4	25.0
本人と同居子	3	12.0	3	13.6	4	19.0	2	12.5
単独	2	8.0	1	4.5	1	4.8	—	—
計	25	100.0	22	100.0	21	100.0	16	100.0
高齢者がいる世帯	20	80.0	18	81.8	19	90.5	14	87.5
高齢者のみの世帯	9	36.0	7	31.8	6	28.6	5	31.3

注) 最年長世代をエゴとする。

表6 農家人口の内訳

細野地区

年次	計		15歳以下		16-19歳		20-29歳		30-39歳		40-59歳		60歳以上	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1980	151	100.0	27	17.9	9	6.0	15	9.9	12	7.9	55	36.4	33	21.9
1985	123	100.0	18	14.6	6	4.9	9	7.3	15	12.2	36	29.3	39	31.7
1990	120	100.0	18	15.0	3	2.5	11	9.2	17	14.2	31	25.8	40	33.3
1995	101	100.0	7	6.9	7	6.9	4	4.0	12	11.9	23	22.8	48	47.5

朴の木地区

年次	計		15歳以下		16-19歳		20-29歳		30-39歳		40-59歳		60歳以上	
	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N	%
1980	181	100.0	33	18.2	12	6.6	18	9.9	18	9.9	61	33.7	39	21.5
1985	147	100.0	26	17.7	4	2.7	4	2.7	16	10.9	52	35.4	45	30.6
1990	115	100.0	20	17.4	5	4.3	4	3.5	13	11.3	28	24.3	45	39.1
1995	91	100.0	11	12.1	4	4.4	4	4.4	5	5.5	25	27.5	42	46.2

資料:「統計でみるやすづか」1982,1987,1997年版

一名で構成されている。地区内の組織には葬礼時の相互扶助の単位として藁組がある。現在では四班に分けられ、道普請や農機具の共同所有の単位ともなっている。道普請については、以前は出不足金を徴収していたが、いまではやめている。集落の共有地が少しあるが、実際にはすでに共同利用されていない。区費は戸数割・固定資産割・所得割で三段階にわけて徴収している。以前は五段階だったが、世帯数の減少をうけて割り方を簡素化したものである。家連合としてのヤウチは、現在ではほとんど従前の機能を喪失している。檀家組織については、集落内の家が従来から三つの寺に分かれて帰属していた。

細野地区は、安塚町のなかでも際だって独自のムラおこし活動を展開している。地区全体を「自然王国ほその村」に見立て、毎年五月に催される「山菜祭り」の開催や宿泊施設の運営による都市交流、笹だんごの加工販売、木工品の製作販売、農業基盤の整備を四本の柱に据えて、外部からの訪問者や他出

表7 細野地区の年表

1979年	住民有志が「青壮年会」を結成、伝統行事を復活。
1983年	住民の有志が「あじさいクラブ」を結成。また、農業機械の共同利用と作業受託を目的として「振興組合」を設立、地域農業の再生をめざす。
1989年	「自然王国ほその村」を建国。山菜祭りと横浜市鶴見区（みどりの会婦人部）との産直などを展開。細野生産組合を設立、農産物・木工加工などを計画。
1993年	近隣の坊金集落と合同で「中川地区活性化委員会」を組織、集落の意向調査をとりまとめ、農林業主体の活性化策を樹立。
1994年	「住民主導の手作りのムラおこし」が評価され、「豊かなむらづくり全国表彰事業 農林水産大臣賞 農業集落の部」受賞。 新潟県山間地域活性化総合対策事業指定を受ける。 笹だんご等加工所「かあちゃんの家」・木工品加工所「工房ほその村」が完成。
1996年	宿泊施設「六夜山荘」を開設。
1998年	第3回棚田サミットの分科会が「六夜山荘」で開催される。

注) 安塚町編『まちづくり受賞記念フォーラム資料集』などをもとに作成。

中の集落出身者にとって魅力のある地域づくりを積極的に推進してきた。この間の活動の経緯は、表7のとおりである。

細野地区でこのようにムラおこしの動きが活性化した背景を、前区長のOさんへの聞き取りをもとにまとめておきたい。

ムラおこしの端緒となったのは、一九八三年六月、前区長（当時六〇代）、Mさん（同五〇代）、Oさんの長男のAさん（同三〇代）の三人を中心とする有志若干名が結成した「あじさいクラブ」の活動だった。当時すでに、過疎化（とりわけ若年人口の減少）や二兼化が相当進行しており、一部の年中行事が休止状態にあるなど「農村文化の継承」はきわめて難しい局面に立たされていた。そうした状況に危機感をもった人たちが中心になって、細野の伝統行事の復活にむけた対策を検討する組織として結成されたのが、あじさいクラブである。

もともと細野には、春と秋におこなわれる諏訪神社の例祭のほかに、毎年五月八日には「六夜山の祭り」が開かれていた。明治の半ばころ米山神社からもらったお札を六夜山の祠にまつり、これを「細野米山さん」と呼んで毎年祭礼をとりおこなったものである。昭和二〇年代、戦後の混乱期から復興期にかけて、地区には青年会に所属する若者が四〇人ほどいて、一〇月末から翌年の四月半ばまで小田原や湯河原の「みかん場」に毎年出稼ぎに出たが、かれらも五月の祭りまでには帰郷したものだだったという。集落の人たちにとって、この行事は一年のサイクルのひとつコマとしてしっかりと定着していた。ところが、昭和三〇年代後半（一九六〇年代）以降、高度経済成長によって都市部で大規模な雇用創出が起きると、若年人口はどんどん細野を出て行き、二〇年代には五六戸だった世帯数が急速な減少をづづけているうちに、「六夜山の祭り」はいっしょかとりおこなわれなくなってしまった。

あじさいクラブは、この祭りの復活をめざしてアイデアを練るなかで、「山菜」という資源に着目することに

なる。折からの山菜ブームで細野の山林にも無断で入り込んで山菜を採る人があとを絶たず、禁止の札を立てても事態はいっこうに改まる様子がなかった。Oさんたちは、山菜採りを有料化し、六夜山の祭りを外部の人たちに山林を開放するイベントとして仕立て直すことを思い立った。うまくゆけば、山菜の無断採取の抑止と伝統行事の復活という二つの課題をいっしょに解決する方途になる。

訪問客の接待や案内などを集落の全員で分担することを呼びかけ、一九八九年、「自然王国はその村」を「建国」し、第一回「山菜祭り」の開催にこぎ着ける。この年には「細野生産組合」も設立されており、現在に至るムラおこしの地盤が整えられている。

外部からの参加者は、大人二〇〇〇円（当初は一五〇〇円）、中学生以下は一二〇〇円を支払い、午前中は自由に山菜を採取し、昼からは集落住民、参加者がそろって宴会を開く。初回の参加者は六〇人ほどだったが、口コミなどで裾野を広げてゆき、第三回（一九九一年）には一五〇人ほどになり、現在では毎年二〇〇人前後が訪れるようになっていく。そのうち約四割は、毎年のように訪れるリピーターである。広報活動として、新聞への折込広告にくわえ、参加者名簿をもとにした手紙による連絡もおこなっている。当日は、山菜の即売会も開かれる。第一回の祭りが成功するまでは、参加者数の不足によるリスクなどを懸念する住民も多かったが、回を重ね、参加者が増えてゆくにしたがい、住民のあいだにもガイド、受付、そのほかの裏方仕事などに自発的に参加する空気ができあがってゆき、現在は集落総出で恒例となったこのイベントを支えるまでにいたっている。

「山菜祭り」の成功は、思いがけない副産物をもたらした。

ひとつは笹だんごの加工販売である。山菜採りの参加者にあふった手作りの笹だんごが好評で、町の物産展などのイベントにも出品、そこでも好評を博した。これらがきっかけとなり一九九三年に「新潟県山間地域

活性化総合対策事業」の実施にあたり、町が各集落に意向調査をおこなったさいに、細野からは笹だんごなどの加工施設の設置申請が出される。この申請は翌年、木工品加工施設の設置とともに事業指定を受けることになった。こうして翌九四年、笹だんごの加工所「かあちゃんの家」と木工品加工所「工房はその村」が完成する。

「かあちゃんの家」は一〇年の償還で五〇〇万円を借り入れてスタートした。地元負担は二〇%だった。一箱一〇個入りで一二〇〇円の手作り笹だんごを主力に食品の加工と販売を手がけ、現在では年間の売り上げが一〇〇〇万円近くに達する。現在は地区の女性六人がかかわっており、笹だんごづくりが現金収入を稼得する機会として定着してきた。

「工房はその村」では、高齢の大工六人が「たばこ銭にでもなれば」と、ケヤキなどの天然素材を加工した花びんや菓子皿、茶托、ぐい飲みなどを製作販売している。もともと細野には五、六反の田で米作りをするかわら、大工・茅葺き屋根職人・桶屋などを営んで生計をたてる世帯が多かった。木工所の設置は、現役を退いた職人たちの能力活用のもとでも有効に機能している。

「山菜祭り」のもうひとつの副産物は、宿泊施設の建設である。山菜祭りの日は午前八時半から受付がはじまり、山に登って一〇時半まで、約二時間山菜を採る。一時には六夜山頂に集合し、正午から午後二時までが宴会の時間になっている。当初は宴会が終わると参加者は三々五々、帰宅していた。こうした日帰りの行楽に気ぜわしさを感じた人々たちから「地区に宿泊施設があればもつとゆつくりと過ごせるのに」という要望がたびたび寄せられたことがきっかけとなり、右に述べた山間地域活性化事業の一環として獲得した補助金で、九六年、宿泊施設「六夜山荘」が完成・開業する。五つの和室、泡風呂、三六畳の交流室を備えた六夜山荘は、区長をはじめ集落住民全体の協力体制のもとに運営されている。宿で出す米や野菜は、集落の農家からの買い上げでまかない、調理や接客、客室の整備などのサービスは地区の女性たち一二、三人が当番制で担当する。建

物じたいは補助金でつくられたが、運営にかかわるコストやサービスについては、集落住民の自主的な参加によって独立採算主義を貫徹している。

「山菜祭り」の成功は、集落住民のムラづくりへの参加意欲を従来にくらべて格段に高めるきっかけとなり、同時に、単発のイベントに終わらせなかったことで、上記のように人・モノ・サービスをととした都市交流活動の拡がりに結びつくことになった。一連の活動は「住民主導の手作りのムラおこし」として高い評価を受け、九四年には「豊かなむらづくり全国表彰事業 農林水産大臣賞 農業集落の部」を受賞している。

細野ではまた、農家有志による貸し農園事業「コシヒカリオーナー制度」を展開している。これは一年契約（更新も可能）で一人につき五〇〇平方メートルの田を九万円で貸し付け、玄米三俵（一八〇キログラム）を収穫量として契約者に直送する事業である。九九年の時点では、〇さんをはじめ七戸の農家が協力し、主として首都圏在住のオーナー十数人と契約が結ばれている。安塚町のほかの集落にも同様の試みはあるが、農家の協力を得るのが難しく、うまく機能していないのが実情である。にもかかわらず、細野でこの事業が成り立っているのは、協力農家が経済的な利得だけでなく、都市住民との交流をはかる貴重な機会としてこの事業の意義を評価していることによっている。前区長によれば、農家の人たちのこうした考え方も、「山菜祭り」をととした交流の体験をとおして培われたものである。

ムラおこしのスプリングボードとなった「山菜祭り」の企画をうみだした「あじさいクラブ」が結成された一九八三年には、「細野振興会」という組織もつくられている。あじさいクラブの活動が集落の伝統文化復興を志向したのに対し、振興会が取り組んだのは増加しつづける集落内の耕作放棄地への対応だった。国の減反政策に協力して転作地に充てた水田が、保全管理もおこなわれないまま荒れ放題にされ、集落全体の景観も様変わりしようとしていた。しばしば指摘されるように、非耕作地の放棄は水や農道の管理にも重大な支障を来た

すことになる。振興会では、高齢で農作業が困難になった農業者や、相続等によって土地の所有権をもちながら町外に居住するいわゆる「不在地主」にたいし、作業受託を提案して農業環境の保全につとめてきた。トラクター三台の共同購入・利用など機械の共有化もはかっている。同時に、九五年度には土地利用計画の策定に着手し、集落に散在する圃場の選別と広葉樹の植林による生態系の保全を目指して着実に農業基盤の整備をすすめてきた。隣接しあう数枚の圃田を「団地」としてくり、団地ごとに共同利用できる保水池の整備をすめ、耕作続行が可能な圃場を選別して集落の農家全体で守っていく態勢を構築すべく、合意形成をはかっている。一部の「団地」では、育苗の段階からの作業共同を実現している。

三―二 朴の木地区の概要

朴の木地区は安塚町の町場から車で三〇分ほど長野県境に入った山のなかに位置する。安塚町のなかでも比較的アクセスが不便なところにある。

表4によると、朴の木地区の人口と世帯数は、一九五五年に三九九人、六七戸であったが、一九六五年には三一九人、六六戸、一九七五年には二〇六人、五二戸、一九八五年には一四七人、四四戸、一九九五年には一〇一人、三二戸と減少してきている。人口、世帯とも一九六五年から七五年にかけてもっとも減少しているが、現在までずっと減少しつづけている。農家人口の推移(表6)をみると、細野地区と同様に、八〇年から九五年の間で六〇歳以上人口割合が二・五%から四六・二%へと上昇している。

一九九九年の夏に実施した面接調査で協力を得ることができたのは、朴の木地区では二一戸である。その類型別の内訳は、夫婦のみの世帯が一戸、夫婦が子と同居している世帯が五戸、配偶者と死別した高齢者が子と同居している世帯が四戸、単独世帯が一戸となっている。表5にみるように、高齢者がいる世帯が一九戸で

全体の九割を占め、高齢者のみの世帯が六戸（二八・六％）を占めている。地区の高齢人口比率は四三・〇％である。高齢者のいる世帯数は一九戸で、九割を越えている。

表8は朴の木地区のおおよその経緯を記したものである。一九六七年に県単の事業で農道を整備した後、一九七六年から八一年にかけて、地滑り対策を兼ねて圃場整備をおこなった。また、一九八四年の新潟県山間地域活性化事業で二六馬力のトラクターを八戸が共同で購入した。かかった費用は、七〇％の補助が出たので、一戸が八万円ずつ負担した。その後、新しく一〇戸でトラクターを共同購入したことから、個人でトラクターを所有している家が四戸ある。ブルドーザーは朴の木に三台あり、そのうち一台は地区の所有で、ほかの一台は二戸が共同で除雪用のブルドーザーを所有している。残りの一台は個人所有である。一九九九年には地区で除雪協力者を決めた。ほかに減反活性化事業でソバの加工場をつくった。

表 8 朴の木地区の年表

1967年	農道整備。
1976-81年	県単事業で地滑り対策に圃場整備。
1980年頃	「めおと会」を有志で結成。
1982年	朴の木生産組合を8戸で結成。
1984年	防雪機を3戸で共同購入。 新潟県山間地域活性化事業でトラクターを8人で共同購入。
1985年	農産加工場を建設し、味噌・漬け物・総菜加工をする。灯火グループ・トラクター・グループを結成。
1980年代後半	にじます組合を結成。
1993年	「カルチャーセンター田舎屋」を小学校の跡地に建設。
1996年	「読書友愛会」を結成。
1999年	「朴の木を考える会」を結成。子供会を解散。
2000年	コシヒカリオーナー制度開始。

注) 聞き取り調査により作成。

一九八二年に「朴の木生産組合」を結成し、Kさんが組合長になった。一九八五年には農産加工場を建設し、総菜・味噌・漬け物をつくり、「灯火グループ」とトラクター・グループを結成した。灯火グループは現在四人いて、ソバをつくっている。毎年一月におこなうソバ祭りという町の行事や後述する「田舎屋」にソバを卸している。代表者のKさんは一九九七年に農水省局長賞を、二〇〇二年には毎日農業記録賞優良賞を受賞している。また、一〇年前から「にじます組合」を三戸で結成して田舎屋に鱒を卸している。そのほか、野菜を卸す野菜グループと、山菜を販売したりする山菜グループがある。

一九九三年に小学校の跡地を利用して町営の宿泊施設「田舎屋」がオープンした。田舎屋の開設は朴の木のムラづくりにとって大きな転機となった。これ以降は田舎屋を核にしてムラづくりが動きはじめたのである。小規模ではあるものの食事づくりや宿直といった雇用が生まれ、住民は田舎屋の運営への参加を通してムラづくりにかわるようになった。田舎屋運営協議会委員は隣接する菅沼と朴の木の二地区の住民で構成されており、このうち朴の木からは、選挙で選出された一〇名と組長三名が加わっている。

田舎屋の開設を端緒とするムラづくりの動きは、「朴の木を考える会」の結成に発展する。これは、村びとの有志が集うかたちで一九九九年に発足したものである。町は二〇〇〇年度に「集落魅力発見事業」を開始し、各集落に活性化対策のアイデアを募っている。朴の木では「考える会」が中心となってこの事業に応募するアイデアをめぐる話し合いがもたれている。町が導入したコシヒカリオーナーも、朴の木では四世帯が参加している。六人いた中学生と小学生が二〇〇〇年には三人になるため、朴の木の子供会は一九九九年に解散した。老人クラブは「楽生会」という名前前で、六〇歳以上の人が道に花を植える手伝いと草取り、氏神社の掃除などを行っている。婦人会は活動していない。青壮年会は五〇歳以下の男性の集まりで、小正月のサイノカミの行事をしている。消防団は二〇歳から五〇歳までの男子から構成されているが、朴の木には三〇歳代の男子七名がい

て、四つの集落で一つの部署をなしている。そのほか二〇年以上前に、個人的な集まりのグループとして七組の夫婦が「めおと会」を結成している。

朴の木地区の行政機構は、区長と副区長、会計がそれぞれ一名ずつ、そのほか消防係二名、労務資材係一名、環境整備を兼ねた企画係一名、町道維持管理係四名からなっている。以前はほかに農家組合長がいたが、現在は副区長が兼務している。以前は六つに分かれていた組は、世帯の減少に伴って一九九九年現在三組に再編されている。

現在の区費は一戸平均で五万円ほどである。かつては世帯数割と固定資産割と所得割の三つで判断していたが、現在は所得割に一本化している。道普請は七月に草刈りがある。出不足金は昔から徴収していなかった。また、高齢者世帯は道普請が免除されている。

ムラの神社は神明社といい、拝殿がなく小さな祠があるだけで、御神体は神明と八幡が合祀してある。氏子総代は区長が兼務しており、祭祀の経費は一戸一五〇〇円徴収して賄っている。

安塚町では同族をやウチと称している。ヤウチにはチカイヤウチとトオイヤウチがあるが、チカイヤウチだけでは行事ができないため現在ではトオイヤウチを含めている。こうしたヤウチは、朴の木では現在六つある。このうち、ナカノヤシキは、小山姓が三戸、松苗姓が二戸、石塚姓が一戸の計六戸である。このヤウチを構成する戸数は戦前には二〇戸くらいあったというから、三分の一くらいまで戸数が減少している。

かつては農作業のユイや手伝いはチカイヤウチやシンルイとおこなった。これは無償であった。その代わりに、春に「礼呼び」をした。結婚式はヤウチのみ出席するが、葬式はヤウチは別にお包みし、ほかの人は生活改善で千円と決まっている。ヤウチの数が少なくなってきたので、一九九八年の春の総会で近隣組が代わって協力するように打ち合わせて決めた。

四 家の 変 容

本節では、一九九九年の調査で得られたデータを手がかりとして、細野と朴の木の二地区における家の現状を概観しておこう。

すでに概況でふれたように、一九九九年時点における細野・朴の木両地区の高齢人口（六五歳以上）比率は、それぞれ四五・五%、四三・〇%と、安塚町全体（一九九五年）の二八・五%を大きく上回っている。安塚町じたいの高齢人口比率も全国平均とくらべて相当高いが、両地区の高齢化はその町よりもさらに先行的に進展している。従属人口指数（生産年齢人口 \div 一〇〇）をみても、細野が一〇二・六、朴の木が八五・七と、町（一九九五）の七三・三よりさらに高い値である。年少（一五歳未満）人口は細野で五・二%、朴の木で三・一%を占めるにすぎないことから、従属人口の大方に寄与しているのは高齢層である。数値だけで見ると、細野地区のばあい、すでに現役世代一人が一人の高齢者を支える状況ができてきている。朴の木でも現役世代の負担がきわめて重いことには変わりはない。

つぎに世帯を単位として高齢化の状況をみてみよう（表5）。高齢者のいる世帯は、細野地区で八割、朴の木地区ではほぼ九割を占めている。このうち、細野地区の三世帯、朴の木地区の六世帯では、すでに世帯主が子に代替わりしている。

子との同居率はいずれも五割前後で、残りの半数は夫婦世帯と単独世帯（両地区いずれのケースも七五歳以上のひとり暮らし）である。日本全国では、一九八〇年代以降、同居率は一貫して減少トレンドにあり、厚生省の国民生活基礎調査によれば、高齢者の子との同居率は八〇年には六九・〇%であったが、九九年には四九・

三%と五割を割り込んだ。両地区の数値は、ほぼこれと同水準にある。中山間地の家族であるからといって、同居率がとくに高いわけではない。

代替わりせずに既婚子と同居している世帯（いわゆる「直系家族世帯」）では、両地区ともすべてのケースが長男夫婦との同居となっており、近年都市部を中心に増加している娘夫婦との同居はみられない。この点で、家を長男が継承する形態は根強く残っている。今後の同居意向については未定との回答も目立ち、長男と同居するにしても現在を望む声は多く聞かれた。ただし、この設問については未定との回答も目立ち、長男と同居するにしても現在暮らす家に長男家族が入ってくるかたちを考えているとはかぎらないので、その点は留意する必要がある。家業である農業の後継問題についてたずねた結果では、細野地区の一二世帯（四八・〇%）、朴の木地区の一三世帯（六一・九%）が「自分の代で終わりにする」と回答しており、細野で五割、朴の木では六割の世帯が、家業もふくむ「家督」のすべてを子に継承できるとは考えていない。

家意識をめぐる状況は、本分家関係の現状からも推察できる。本家が他出したと回答した世帯は、細野で七世帯（二八・〇%）、朴の木では一五世帯（七一・四%）にのぼる。分家についても、集落内にとどまっているのは細野で九世帯（全分家の三四・六%）、朴の木で二世帯（同じく九・一%）にすぎない。ヤウチの数をみると、細野では最頻値が一つ（七世帯二八・〇%）、朴の木では四つと五つ（各五世帯二三・八%）と、細野地区ではとくに少ない数に集中している。これらのことから、親族関係が地域社会の基軸をなしているとはもはやいえない状況であることがわかる。つまり、両地区とも、家を単位として地域社会のさまざまな機構を維持していく条件はかなりの部分くずれてしまっている。このことは、親族集団が担保してきた生活扶助機能を代替する仕組みを立ち上げる必要を生じさせているともいえる。

以上のことから、家は、家業の継承という面で維持することが難しい局面を迎えており、また地域社会関係

の維持という面でもその重要性は相当低下していることがわかる。

五 親世帯と別居子との世帯関係の事例と考察

この節では、朴の木地区における親世帯と別居子との世帯関係の事例を紹介し、親世帯と別居子との世帯関係をより具体的に検討したい。

ヤウチ関係がすでにほぼ解体されている細野にくらべ、朴の木ではヤウチやトナリといった従来型の社会関係が残存している。それだけにかえって、朴の木の事例を検討することで、山村の地域生活と家に生じている変化の深度を測ることができるだろう。なお、注記した箇所を除き、年齢等の記述内容は一九九九年の調査時点のものである。

五―一 親世帯と別居子との世帯関係の事例

〔事例1〕

一九二四年生まれで七五歳の世帯主の父親と一九二五年生まれで七四歳のその妻と世帯主夫婦とその子が同居している。世帯主の父親は土木建築業、母親は農業に従事し、農閑期には二人とも土木作業に従事してきたが、現在父親は体調を崩しており、母親が看病にあたっている。世帯主は一九四八年生まれで五一歳、農業のほか内装業に従事し、妻は一九五一年生まれで四九歳、縫製業に携わっている。そのほか次女から四女までの就学中の娘三人の計七名が同居している。高校を卒業したばかりの一九歳の長女一人だけは長岡市で働いている。子は娘のみであるが、娘に婿をとって跡を継いでもらうつもりはないという。

世帯主の両親は孫に小遣いを年間に少しわたしているくらいで、家計は世帯主夫婦が担っている。長女は年に一回帰ってくるが、正月と盆は仕事の関係で帰れない。親は長女に一、二か月に一回くらい連絡をとっている。

世帯主は、「女は家においてばかりでかわいそうだ」と思い、近所の親しい夫婦に声をかけ、つごう四組が集まって「千円会」をつくった。その三年後に「めおと会」に改称してすでに二〇年経つ。会費として月額一人千円を徴収し、その積立金で年一回旅行に出かけている。会のメンバーは現在九組に増えた。そのうち現在も朴の木に残っている家は八戸で、当初からのメンバー一戸が山を降りている。残った八戸のうちでも二戸では若い人がすでに山を降りている。

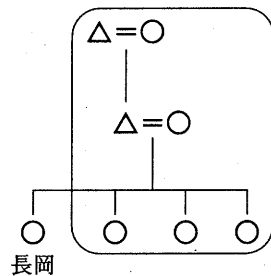
ヤウチを構成している世帯は五戸あるが、そのうちの二戸は一九九八年に隣村の浦川原村に移転したので四戸になった。事例6はそのヤウチの一戸である。葬式のみヤウチとは付き合っている。年始参りの行き来は、一九八〇年代前半くらいからなくなった。

除雪機を三戸で共同購入したが、うち一戸が離村して現在は近隣の家と二戸で共用している。

〔事例2〕

一九二六年生まれの七三歳の世帯主と、同じく一九二六年生まれの七三歳の妻の二人暮らし。世帯主は長年町議会議員を務め、今は引退して農業に従事している。ほかに地域館長の経歴ももっている。妻はずっと農業に従事してきた。田の耕作は一町三反、畑は五反、山林は二町ある。コンバインと田植機は個人で所有し、ト

事例1



注：括弧内は同居者。
キョウダイの出生順は左から。
以下同じ。

ラクターは一〇戸からなる生産組合で共同所有している。畑は妻が、田は夫と長男が、それぞれ耕作している。ヤウチのなかで二戸が手伝いに来る。

本家は一〇〇年ほど前に他出して現在の消息は不明。分家は数戸あったがすべて他出し、一戸を除いてほかの家はわからない。ヤウチは六戸で、すべて他出した本家の分家である。

世帯主は長男で、ほかにキョウダイが三人いる。長姉は牧村、次姉は安塚町、弟は東京にそれぞれ住んでいる。盆には東京に住んでいる弟を除いた姉二人が墓参りに来る。農作業の手伝いにはキョウダイは誰も来ない。

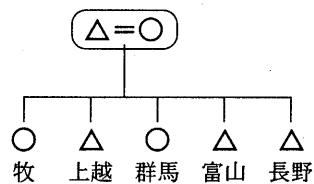
世帯主夫婦には子が五人いる。長男は一九五二年生まれの四七歳で上越市に居住し、消防署に勤務している。この長男は、三日に一回くらい顔を見せ、田植えや稲刈りなどの農作業の手伝いにも来る。世帯主も長男は跡継ぎなのでなにかと相談しているという。長女は一九五〇年生まれで四九歳で近くの牧村に居住し、安塚の農協に勤務していることもあり、四日に一回くらいおかずなどを買って訪れる。農作業の手伝いには来ないが、盆や正月には来る。次男は一九五五年生まれの四四歳で富山県に、三男は一九六二年生まれで長野県に、次女は一九五四年生まれの四五歳で群馬県にそれぞれ住んでいる。遠くにいる子のうちで三男だけが盆に来て墓参りをする。

世帯主夫婦は、身体が動けなくなったら、上越市の長男の家に移ることを考えている。

〔事例3〕

世帯主は一九二八年生まれの七一歳、妻は一九二七年生まれの七二歳で二人暮らし。現在の世帯主で四代目

事例2



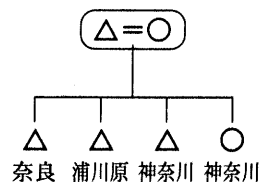
にあたる。世帯主は東京で生まれ、二歳のときに朴の木に帰ってきた。学校卒業後、名古屋で一〇年ほど出稼ぎし、その後二〇年ほど鉄道の下請けに従事した。妻は、結婚前は冬場に女中奉公に行っていたが、結婚後はずっと農業に従事してきた。

田は一町一反、畑は三畝、転作に充てている分が一反八畝ほどある。山林は一町弱所有している。コンバインは個人所有であるが、トラクターは一〇戸で共同所有している。田植機はチカイヤウチの一戸と、ブルドーザーはヤウチの一戸とそれぞれ共同所有している。田は世帯主が主に作業し、畑は妻が主にしている。夫は鱒の養殖もしている。

子は四人で、長男は一九五〇年生まれ、四八歳で奈良県に、次男は一九五一年生まれ、四七歳で浦川原村に、三男は一九五三年生まれの四六歳で神奈川県に、長女は一九五六年生まれの四二歳で神奈川県にそれぞれ住んでいる。長男は百姓をしたくないので家を出た。次男は上越市に勤務している。次男の妻は教員で、次男夫婦の三人の子はいずれも就学中である。この次男は一時期朴の木で両親と同居していたが、子が大きくなり不便になったので、近隣の浦川原村に転居した。こうした事情から、両親は次男が跡継ぎになると了解している。盆と正月には次男以外は帰省して来ない。しかし、墓参りには盆を外して来る。農作業の手伝いに来るのも次男だけである。電話のやりとりも、次男の家とは頻繁にあるが、ほかの子たちとは時たまあるだけだ。世帯主夫婦は四人の子に米や餅、椰子などを毎年宅急便で送っている。四人の子は両親に生活費や小遣いの補助などとはしていない。将来、土地と農地は次男に管理してもらいたいという希望をもっている。

ヤウチは、チカイヤウチが四戸、トオイヤウチが一戸の計五戸ある。ヤウチとは結婚式と葬式のときには出席する。農作業はヤウチどうしで手伝いあったが、昭和四〇年代に機械化されてからは手伝いにいなくなっ

事例 3



た。年始参りも昔はあったが、現在はいかなかった。

世帯主には頻繁に酒を飲み合う親しい友人がいる。そのなかにトナリの家の世帯主とその妻がおり、夫婦どうしでよく旅行に出かける。

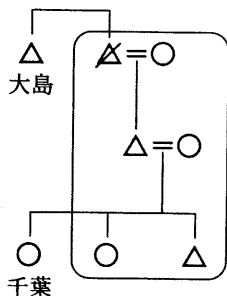
〔事例4〕

世帯主は一九四三年生まれの五六歳、妻は一九四八年生まれの五一歳で、一九七六年生まれで二三歳の長男と一九七四年生まれで二五歳の次女、それと一九一九年生まれで八〇歳の母親の計五人が同居している(注記―母親は二〇〇〇年に亡くなった)。一〇〇年ほど前に分家し現在の世帯主で三代目になる。本家は昭和二〇年代に他出して埼玉県に住んでいる。世帯主の父親の弟が昭和三〇年代に近隣の大島村に分家している。

世帯主は学校卒業後、東京の間屋で注文取りの仕事をし、その後名古屋で菓子製造に携わったのち転職して電気店に勤め、その後朴の木に戻り安塚町で電気線工事の仕事に就き、一九七一年から小学校で用務員をしてきた。島根県出身の妻は、名古屋で会社員生活を経て菓子屋に勤め、結婚を機に夫とともに朴の木に来了。一九七一年以後は町で調理士の仕事につき、一九九四年から三年間は田舎屋で働き、一九九七年からは町のクリニックに勤務している。長男は高校卒業後も親と同居し、浦川原村の自動車会社で修理の仕事に就いている。長女は高卒後東京に出て働いたのち、結婚して現在は千葉県に住んでいる。次女は親と同居しながら浦川原村のスーパーに勤務している。

一九一九年生まれ母親は尋常小学校卒業後、一四歳で牧村に一年間奉公に出た後、朴の木内のよその家に二年間奉公に出、一七歳から二一歳ま

事例4



では東京の呉服屋で働いた。二二歳で安塚に戻り、その後二年間は農業に従事するかたわら冬場は東京の呉服屋に出稼ぎに行った。二四歳で結婚してからは農業に従事してきた。現在の世帯主は、父親が七五歳のときに家長を譲り受けた。

田は八反あり、そのうち三反を世帯主夫婦で耕作している。転作は三反で池に鯉を飼い、ソバをつくっている。畑は五畝で大根や白菜、キャベツ、キュウリ、ナスをつくっている。同じ町の人と小作契約して田を受託している。受託料は一反一俵で、計一〇俵である。農業は自分の代で終わりにする予定である。

ヤウチは母親の実家一戸だけである。トオイヤウチはない。昭和三〇年代からヤウチが他出したので、近所の家に依頼してヤウチになってもらっている。ヤウチとの付き合いは、冠婚葬祭にかぎられている。火葬場が大島村に移ってからは、そこまで同行するのはヤウチだけになっている。昔はヤウチどうしで農作業の手伝いもしあったが、現在はしていない。父親の代までは年始参りや墓参りにも行ったものだが、現在はしていない。長女は盆や正月に帰省して墓参りをするが、農作業の手伝いには来ない。電話は毎週かかってくる。世帯主夫婦は時期ごとに米や野菜を送っている。長女からは敬老の日などに両親宛に衣類、母親宛には財布などが送り届けられる。

トナリはもともと四戸あったが、一九九八年に一戸が離村し、現在は三戸（うち一戸は事例2の家）である。過疎化の進行とともにトナリ関係の意味あいも以前とはずいぶん様変わりし、現在ではモノをもらったらお返しをするといった、近所付き合いのようなものになっている。なお、トナリの家とは、葬式時に一人だけを呼ぶ「一人呼び」の関係である。

世帯主夫婦は先述したためおと会に入っており、メンバーとは年六回ほど飲み会を開いている。このうちの三戸とは家族ぐるみの付き合いで、お茶飲みも頻繁にしている。

世帯主の亡き父親の母親であるマゴバアサンの実家が離村して静岡に移ったが、このとき墓を持っていかなかったため、この家の墓の世話をしている。

〔事例5〕

一九三八年生まれで六一歳の世帯主と一九四〇年生まれで五九歳の妻、それと一九〇八年生まれで九一歳になる世帯主の母親が同居している。世帯主は農業に従事していたが、昭和五〇年代の後半から建設会社勤務と兼業している。この間、昭和三〇年代から五〇年代の前半まで、東京での米屋勤務、名古屋での自動車組立の仕事を経験した。妻は安塚町の別の集落から嫁いできた後、もっぱら農業に従事してきた。

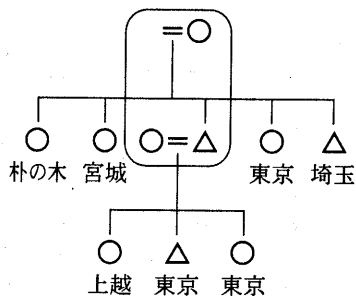
田は一町五反所有し、二反二畝を耕作している。畑は自家用の野菜づくりのために五畝ほど耕しているだけである。転作で五畝を池にして鯉を養殖している。農機具は、田植機五条植えと耕耘機二台、バインダーを所有している。

本家のヤウチがすでに絶えてしまったため、家の分家時期は不明である。分家はあったが、みんな他出して現在は一戸もない。どこに移ったのかもわからない。

かつてたくさんあったヤウチも、現在ではチカイヤウチが本家の分家と孫分家、それとキョウダイ分家の三戸、トオイヤウチが本家の分家二戸のみである。冠婚葬祭の付き合いはチカイヤウチの三戸だけとしている。以前は農作業の手伝いや年始参りも互いに行っていたが、現在はしていない。

世帯主のキョウダイは、一九二九年生まれで七〇歳の姉が朴の木に住ん

事例 5



しており、農業に従事するかたわら、ソバの加工場で働いている。一九四三年生まれで五六歳の妹は東京に奉公に出、結婚後は宮城県に住んでいる。五三歳の妹は東京に奉公に出、結婚後もそのまま東京に住んでいる。一九四九年生まれで五〇歳の弟は埼玉県に住んで製造業に従事している。盆にはキョウダイ全員が帰省し、墓参りをしている。正月に来るのは朴の木に住んでいる一番上の姉のみである。農作業の手伝いには全員が来ない。

一九六八年生まれで三一歳の長男は、東京に住んでタクシーの運転手をしている。長女は一九六五年生まれの三四歳で、東京の化粧品会社に勤務した後、米国生活を経て、結婚後は上越市に住んでいる。一九七三年生まれで二六歳の次女は独身で東京に住み、お茶屋の店員をしている。長女と次女は盆に帰省しているが、長男は来ない。正月には長女のみが来る。農作業の手伝いには誰も来ない。電話は長女と次女とは月に二、三回するが、長男とは年間に二、三回くらいである。米と野菜は、とれれば子の全員に送る。子の全員が食料品を送ってくれる。生活費のやりとりはどの子ともない。

ところで、一九七八年に亡くなった世帯主の父親（一九〇三年生まれ）の香典控え帳が残っている。それを見ると、持参したものでいちばん多いのは、白米三升とローソク三丁、味噌と野菜、見舞金千円というケースで、これは当時ヤウチ関係にあった六戸である。ついで多いのは、白米三升とローソク三丁、味噌と野菜を持参しているケースで、これはシンルイにあたる。つぎに、白米一升とローソク三丁、味噌と野菜を持参しているケースで、ついで白米が五合とローソク三丁、味噌と野菜を持参しているケースとなり、持参する白米の量はヤウチとシンルイが三升、それ以外は一升、五合と少なくなっている。このように金銭以外に香典を持参している家の内訳は、朴の木在住が三戸、それ以外は朴の木に隣接する菅沼が三戸、東京が二戸、その他が二戸の合計三八戸である。そのほか、金銭のかたちで香典を持参している家が五二戸あるが、それらはすべて町外在住者である。

〔事例6〕

世帯主とその妻、世帯主の母、世帯主の長男の四人暮らし。世帯主は一九四九年生まれの五〇歳でずっと農業に従事してきたが、一九八〇年代以降は浦川原村の建設会社で働いてきた。妻は同じく一九四九年生まれで安塚町のほかの集落出身で、夫と同様の仕事をしてきた。世帯主の母親は一九二五年生まれの七四歳で本家から嫁いで来て以来ずっと農業に従事してきた。長男は一九七七年生まれの二二歳で、上越市で修理工の仕事に就いたあと、現在は浦川原村の建設会社に勤めている。長女は一九七三年生まれ。結婚して現在は上越市に住んでいる。

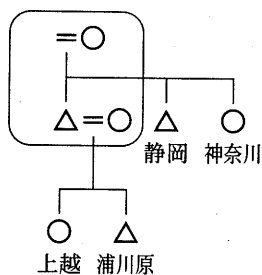
本家は朴の木に残っているが、ほかの分家は上越市に他出して、今はひとつもない。本家からは二〇〇年ほど前に分家した。

世帯主のキョウダイでは、一九五一年生まれの四八歳の弟が高卒後他出して現在静岡県に、一九五三年生まれの四六歳の妹が中卒後他出し、現在は神奈川県にそれぞれ結婚して住んでいる。

田は一町、畑は一反、山林は五反ほど所有している。田は他出した二戸から都合五反を受託し、併せて一町五反耕作している。転作はおよそ六反で、一部は池にして鯉の養殖をし、残りの土地には植林している。コンバインと田植機はそれぞれ二台ずつあり、いずれも妻の実家と共同で購入したものである。畑は母親が耕作し、田は夫婦で耕作している。

他出しているキョウダイと子のうち、盆と正月に帰省するのは長女だけである。長女とは頻繁に電話のやりとりがあり、農業の手伝いにも来る。

事例6



しかし、とれた米や野菜は長女のみでなく、夫の弟や妹にも送っている。そのお返しに、彼らからは衣類や土産物が送られて来る。

世帯主は朴の木に親しい人が三人おり、いつも一緒に酒を飲んだりカラオケに行ったりしている。そのうちの二人とは職場の同僚であり、ほかの一人は事例5の世帯主である。妻は町内の他集落に住む職場の同僚と親しくしている。

ヤウチは本家ともう一戸の計二戸ある。付き合いは冠婚葬祭のみしている。

一九九九年に亡くなった父親の香典控え帳が残っている。それを用いて家関係についてみてみよう。まず、朴の木地区内の家も香典として金銭のみを持参するケースが多くなっている。本家で故人の妻の実家でもある家は三万円とローソク三丁を持参している。本家以外のヤウチは一万円と五千円である。米一升と野菜、ローソク三丁の人が一人だけで、ほかにローソク三丁をつけた人が六人いるが、それ以外の家は金銭のみである。金額をみると、三万円が一人、一万円が二人、五千円が三人、ほかは千円が一六戸となっている。朴の木以外の人が五六戸だった。衆生会から二千円香典が出ている。妻の親しい友人からは一万円と齋米料二千円を香典に出している。夫の親しい友人の香典には千円が包まれていた。

五―二 親世帯と別居子との世帯関係の考察

事例1から6までをまとめて考察することにする。

まず、本家と称されている家はほとんど離村している。そのため、本分家関係からなるヤウチが生産生活上の機能を喪失している。かつて本分家は農作業や冠婚葬祭で人手を出し合う互助的な関係をもっており、本家は冠婚葬祭で亭主役を務めるなど実質的な役割をもっていた。現在でも冠婚葬祭時には本家としての待遇を受

けはするが、おおむね儀礼的な側面のみが残っている。ちなみに、本家が離村した事例4の家では、「本家代わり」の家を事例1に依頼している。ただし、ヤウチが単位となっている活動が完全に消失したわけではない。たとえば、檀家組織の運営においては、ヤウチの代表者が旦那寺の世話人を毎年交替で務めている。

コンバインなどの農機具の共同購入などがヤウチの間でおこなわれているケースもみられる。しかしその数は少なく、むしろ親しい友人どうしの共同が目立つ。

離村したヤウチとの付き合いでは葬式時にかざられるというケースが多くみられる。なかにはヤウチがすべて離村してしまった家もある。こうした事情をふまえて、一九九八年の地区総会で、ヤウチに代わって組（現在は三組）が生活全般にわたって互いに面倒をみることに、葬儀時の香典も一律千円とすることが取り決められた。

ヤウチ以外に家関係としてトナリ関係がある。元来トナリ関係はシンルイ並みの付き合いをする家である。しかし、このトナリもまた少なくなり、その意味合いも薄れて近所付き合いのようなものになってきた。トナリがいなくなった家が近所の家に頼んでトナリになってもらうケースも現われている。

朴の木では、昔から長男が跡継ぎとして家を相続する習慣があった。戦後生まれの世代をみると、事例1と4、5、6では長男が跡継ぎとして親と同居している。しかしその下の世代をみると、未婚の男子が同居しているのは事例4だけであり、ほかのケースは長男を含めて全員が他出している。田畑の耕作規模はきわめて零細であり、それだけで十分な現金収入を稼得することが困難なため、若い世代は全員が勤め人の道を選んでいく。老親世代の引退後に子のうちの誰かが田畑の耕作を引き継ぐ見通しはきわめてきびしい。しかし多くのケースでは、他出子の少なくとも一人が安塚町の近くに住み、親の生活の世話をしている様子が窺える。長男と長女が近くに住んでいるのは事例2と6、次男が近くに住んでいるのは事例3、長女が近くに住んでいるのが事

例5である。長男の都合が悪ければ、誰かが親の老後の面倒をみることになる。親がさらに高齢になって朴の木を離れる場合、こうした近居子たちと同居することが予想される。

近くに住む子は親と電話を頻繁にかけあっており、正月や盆の墓参りに来るほか、田植えや稲刈りの手伝いにも顔を出し、なかには毎週のように買い物をして立ち寄っている人もいる。こうした近居子は、住居は親と別にしていても、実質的には同居しているのほとんど変わらない水準の生活サポートを提供しているとみなすことができる。居住を異にしていることからひとつの家をなしているとは言いがたいが、従来、家が担ってきた、年老いた親の生活支援機能が、こうした親と近居子の関係のなかに姿を変えて埋め込まれていると考えすることはできよう。われわれは別稿で、こうした世帯関係を「近親ネットワーク」として分析した（佐藤・内田 近刊）。

事例5と6には、それぞれ一九七八年と一九九九年におこなわれた葬式に持参した供物別の人数を示しておいた。まず、七八年のケースではヤウチがもつとも多く香典を包み、ついでシンルイ、友人という順で持参する供物は少なくなっている。また、この時点では金銭のみでの香典持参は町外者に限られていた。それに対して九九年のケースでは、全員が香典を金銭のかたちで持参している。また、一九九九年のケースでは、いちばん多く香典を包んでいるのは配偶者の実家であり、ヤウチが持参したのはシンルイや友人と同額である。また、町外者の血縁者のほうが二万円から一〇万円とヤウチよりも多くの現金を持参している。こうした金額の少なさからも、ヤウチがもつ意味合いの希薄化を読み取ることができる。

葬式時にはチカイヤウチが「二人呼び」、トオイヤウチが「一人呼び」で、それぞれ米を二升と一升、そのほかに味噌・野菜・線香・ローソクを持参する。トナリ関係にある人は「一升トブライ」で、米一升と味噌・野菜・線香・ローソクを持参するという。米一升以上の人がお齋を食べる。シンルイ以外の人は「五合トブライ」

もしくは「三合トブライ」と称し、米を五合か三合持参するのが普通である。「五合トブライ」は米五合、野菜・線香・ローソク、「三合トブライ」は米三合と野菜だけを持参する。こうした人はお齋には出席しない。米を出し合って助け合うことをこの地方ではカケマワリといい、主にチカイヤウチどうしでおこなわれた。「五合トブライ」などはナゲコミと称した。このほか、昔は火葬用のマキとワラを隣組が持ち寄っていた。しかし、先述の通り、ヤウチの減少をうけて、一九九八年からは香典が一律千円と決められた。事例5と6にみられる違いは、こうした変化を背景としている。

事例から読み取れることをまとめるとつぎのようになる。

第一に、細野と比較してヤウチ単位の活動が残存する朴の木地区でも、本家や他の分家の離村によつてかつてのような生活互助機能をヤウチに期待することが困難になっている。墓守や檀家組織、葬儀時の手間交換などにヤウチ単位の活動が残っているものの、農作業における労役交換はすでにほとんどおこなわれていない。

第二に、葬儀のように手間の交換が必要となる場合に従来シンルイに準じる関係としてあてにされていたトナリ関係も、ヤウチと同様の事情から、維持することが困難な状況にある。トナリがほとんど離村した家が新たに近隣の家とトナリ関係を結ぶケースもあるが、たいていは近所付き合いと同等の意味合いしかもたなくなっている。そうした事情をふまえて、集落では組をヤウチおよびトナリ関係の機能的代替物として活用することが取り決められるに至った。

第三に、農作業の手伝いや盆・正月の墓参は家単位というより家族単位でおこなわれるようになっていく。しかも、他出した子がすべて参加するケースはあまりみられず、多くの場合、朴の木の近隣に居住する子が最初に親元を訪問したり、電話でのコミュニケーションを頻繁に交わしたりして、老親の生活をサポートしている。このように近居して親を支えているのは、必ずしも跡取りとみなされる長男にかぎらない。かつてヤウチ

が担っていた生活互助的な機能の大方は、現在ではこうした親と近居子の関係に引き継がれている。

第四に、組のようなフォーマルな地域集団とは別に、同年輩で気の合う人どうしが、飲み会を開いたり旅行に出かけたりするインフォーマルな近隣関係を取り結ぶ動きがみられる。

六　む　す　び

本稿では、安塚町の二集落の事例を手がかりに、家の変容と地域社会の変質に焦点をあてて山村生活の現状の一端を考察した。

高度経済成長期を通して全国各地で展開された大規模な人口移動の波は、山村の地域生活も容赦なく呑み込んだ。この間、山村集落は、若年・生産年齢人口層の大量流出に見舞われる。細野・朴の木の二地区もその例に漏れず、過疎化は急速に進行し、農業で生計を立てながら集落で暮らしつづける住民の高齢化も着実にすすんできた。相次ぐ挙家離村は、ヤウチやトナリといった従来型の家関係や近隣関係を維持するのが困難な状況をもたらしている。細野ではヤウチ関係がほぼ解体されており、朴の木でもヤウチやトナリの変質は明らかである。このように、社会的流動性の高まりは集落人口の激減に帰結し、山村の生活組織にドラスティックな変化をもたらしてきた。

社会移動の激化がもたらした変化は、別の角度から切り取ることもできる。細野で地域振興に取り組んでいたOさんは、聞き取りのなかでつぎのように語ってくれた。

昭和三〇年代ごろから人の移動が頻繁になり、人が行き来する範囲もそれ以前とくらべて格段に広がった。かつて近隣に集住していた親族も、各地に散らばって暮らすようになる。そうした親族が集う場面で「仕切り」

をするのに、昔のように「本家だから」まとめ役が務まる、というわけにはいなくなっている。ムラのなかだけで成り立っていた人間関係の論理では、もうやっていけなくなっているのだと。

家族をめぐる言説にはいくつかの定型がある。高度成長期を境に都市部では核家族化が進行したが、農村部には「古き良き日本の大家族」が温存されている、というのもそのひとつである。しかし本稿でみてきたように、山村を見舞った人口流出現象は、世帯の小規模化と家的な関係の解体をもたらした。そのプロセスは、むしろ都市部より足早に進行したとすらいいうる。

本稿でみてきたように、細野や朴の木で暮らしつづける人びとは、それぞれ集落の環境の変化に対応すべく近隣や家族の関係を少しずつ組み換えてきた。細野ではイベントの開催や宿泊施設の経営を通して交流人口の拡大をはかりながら、住民総出で持続可能な地域生活のあり方を模索している。朴の木でも、一方にトナリや組の再編によつて挙家離村によつて生じた近隣関係の欠落を補う動きがあり、他方ではインフォーマルなサークルをつくり新たな近隣関係を築こうとする動きがある。

家の解体への対応としては、両地区とも、親と近居子との間にむすばれる関係が生活サポートを調達する回路として重要度を増している。また、朴の木の事例からも窺えるように、親子関係の疎密を規定する論理は、もはや〈長男＝跡取り＝老後の頼り〉という等式では表わしきれなくなっている。家業・家産の継承がきわめて困難な状況のなかで、キョウダイの位座ではなく、日常の具体的なサポート提供の如何が、親子関係にとって重要な意味をもつようになっていのである。

細野や朴の木で暮らす人びとが取り組んでいる地域生活の再編は、やがて人口減少局面に入る日本社会全体が直面する課題への先行的な対応例としてみることができる。同様に、われわれが朴の木や細野の家族関係のあり方から読み取るべきは、かつてではなく未来の家族の似姿なのではないだろうか。

*新潟大学教育人間科学部

(付記)

安塚町の調査は、一九九九年は新潟大学人文学部社会学演習の一環として、二〇〇〇年については人文学部社会学演習および教育人間科学部社会意識調査演習の一環として、それぞれおこなった。調査にあたっては、安塚町役場の助役丸山新氏、しあわせ推進課専門員の南雲二郎氏、公民館館長の春日サヨ子氏（役職名はいずれも当時のもの）、細野地区の大日向幸夫氏、丸山タカノ氏、朴の木地区の小山弘氏、小山正和氏など地区のみなさまのお世話になった。記して感謝申しあげたい。

引用文献

石川理夫 一九九一「雪『豊かな』町の逆転の発想 新潟県安塚町 一九九一年四月」池本和夫ほか編『ムラに生きる・まちに生きる 全国ムラづくり・まちづくりレポート』ポット出版 一六五—一七六頁。

国立社会保障・人口問題研究所 二〇〇二「日本の将来推計人口 二〇〇二年一月推計」<http://www.ips.go.jp/Japan/cse/newest02/newest02.html>

佐藤康行・内田健 近刊「山村における家の変容と「近親ネットワーク」——新潟県安塚町の事例——」佐藤康行・木佐木哲朗編『変貌する東アジアの家族』早稲田大学出版部、所収。